

## 仲間とライバル

宮城県仙台市立西山中学校

一年 井上花音

「あーあ。眠い。面倒くさいな。」

今日も朝早くから駅伝の練習だ。毎日走らされ、足や手が痛くなるばかりで正直やりたくなかった。それに、部活動に行けなくなるのもすごく嫌だった。でも、あきらめたりするのはもつと嫌で、駅伝メンバーに選ばれたからには、しっかりと取り組もうと決めた。

私は一位という言葉が大好きだ。得意な運動では全て一位をとりたいと思っている。走るの結構得意である。小学生の頃は毎年一位をとっていた。だから駅伝練習でも速いグループに入れるように頑張った。速いグループに入れてもついていけなかったら意味がない。三年生の先輩の背中を追うように走った。駅伝練習が始まった頃は速いグループについていくことができ、三年生の先輩よりも速く走れる時もあった。しかし、毎日のように、走っていると、足などが筋肉痛になったり強い痛みにおそれることがあった。そのせいで速いグループについていけなくなる日が多くなった。それがとても悔しかった。グループにおいていかれ一人で走っていると、ついていけない自分に腹が立っていた。その分余計に変な体力も使ってしまう、疲れがたまって足

が動かなくなっていた。その時、私の横を通ったグループの人たちが「ファイト。」

と声をかけてくれた。そのグループは、私がついていけなかったグループだ。グループの人たちみんながファイトと応援してくれたので力が出てきた。さっきまでおいていかれていたが、やっぱりあきらめるのは嫌いだから、そのグループについていった。足が痛くて辛くてあきらめなくなるけど、ファイトと声をかけてくれた時のことを思い出したり、みんなが頑張っただけに走っていると自分も頑張れた。先生が

「あと一周。頑張れ。花音ついていけ。」

と言ってくれた。あと一周だから頑張ろうと思いついてからゴールにたどりついた。

「疲れた。やっと終わった。」  
と思う気持ちと

「しっかりと走ることができた。」

という達成感があった。この時改めて応援の言葉は力になると感じた。そして、走って楽しいし、学ぶことがたくさんあると思った。

私にはライバルがいる。それは中学一年生の駅伝メンバーの一人だ。その子は体力がとてもあり、足の速い子だ。タイムトライアルで五回計った時も全て負けてしまった。とても悔しかった。でも逆に負けたからこそ燃えてきた。次こそは絶対勝つてやろうと思っていた。だが、その子は足を痛めてしまえば休んでいた。私もその時とても足が痛く、家では立てなくなるほど痛みがあった。けれど今がチャンスだと思った。その足の速い子と差をつけられる時だと思つた。だから足が痛くても勝つため差をつけるために、歯をくいしばって頑張った。

今日、試走メンバーが決まり私は選ばれた。もち

ろん私のライバルも。大勢の駅伝メンバーの中から選ばれて嬉しかった。試走の日も晴れていて暑かった。少し走っただけで汗がダラダラ……。坂があったり平らだったり、体力を使う道が多く、足にも刺激を与えていた。すごく疲れた。でもそのコースを走った時、本番でも走ってみたいと思つた。私には輝いて見えた。だから、本番このコースを走れるようにもつと努力する。

お盆に入るので今日でいったん学校の練習が終わりだ。今日はタイムトライアルがある。タイムが縮む心配だった。しかし今回の練習にゲストの方が来ていて、その人についていけと言われた。タイムを上げるために二キロを精いっぱい走った。その時も見ている人たちと先生方からの応援の声が耳に響いていた。だからゴールめがけて走り、先生が

「八分三十八秒。」

と言つた。私は驚いた。とても速くなっていたからだ。前回より十秒以上も速く走ることができた。とても嬉しかった。足が痛く中でも、頑張つてあきらめずに練習したものがタイムに出た気がした。しかし、明日から九日間休みだ。ここがカギになると思う。自主練習をしっかりと行うか行わないかで、本番に出られるか、出られないかが決まる気がする。だから、人一倍努力し駅伝メンバーに選ばれるように、しっかりと練習に取り組みたいと私は強く思つた。そして私のライバルである足の速い子と一緒に走りたい。ずっと練習を頑張つて私を高めてくれたチームの仲間と、本番の、あの輝きのコースで走りたいと思つている。